

日本畜産物 輸出促進協議会理事

植村 光一郎氏

海外輸出やインバウンド(訪日外国人)需要が縮小し、和牛の価格が昨春、暴落したことは記憶に新しい。価格は形成は需給関係に大きく影響を受け、国内需要だけではバランスが崩れてしまうことが浮き彫りになった。今後は、国内で余ったから輸出するのではなく、世界に向けての需要開拓に大きくかじを切る時代になってくる。



業界深層

価格安定に新傾向

和牛 内外で需要創出

を創出した。価格的魅力に加え、新規顧客の獲得や他社との差別化のため、ファミレスなど新たな業種が和牛を採用するきっかけになった。事業が終了したとしても、メニュー開発で和牛の選択余地ができたことは大きい。産地でも、新型コロナウイルス禍をきっかけとしたイノベーションが起きている。島内に来る観光客やインバウンド需要で需給関係がつかうれていた沖縄県の「石垣牛」産地は、首都圏や海外向けの販路開拓に乗り出した。売り上げの一部を販促活動にあてるチェックオフ制度の導入や消費者交流会の開催など、生産・流通・消費者を取り込んだフードバリエーションの構築に向けた挑戦が始まっている。

原料には国産米を使用する。「ガス直火炊 商品の受託製造や、炊飯を省力化したい飲食

大切な作物のそばの問題雑草に。

バスタ

入る雑草の代表格、 には、バスタが有効です。

地面を這うように伸びていく匍匐性雑草。その代表的なものが、ツユクサ科二年生雑草のイボクサです。葉の汁をつけるとイボが取れると言われることから、その名が付けられました。水田畦畔でもよく見られ、畦畔から茎を伸ばして水田内に侵入して問題になります。

切断された茎からも増えるイボクサ

イボクサは3月下旬頃、比較的低温条件で発芽し、9月下旬頃には開花して種子を形成します。繁殖力が旺盛で、種子だけでなく、横に伸びた茎の節や切断された茎からも根を伸ばして増殖します。

畦畔から侵入する前に、バスタ！

水田畦畔で発生するイボクサは、茎を伸ばして水田内に侵入するため問題になっています。こまめに草刈りをするのも有効ですが、再生が速く、切断した茎が圃場内に飛び込んで増殖することもあるため、畦畔から侵入する前に100〜200倍希釈のバスタですっきり防除しましょう。

イボクサ以外にも、水田畦畔には匍匐性雑草のキシウズズメノヒエ(多年生)、アシカキ(多年生)、アゼガヤ(二年生)、エゾノサヤカグサ(多年生)が発生するため、バスタでの同時防除がお勧めです。



多発圃場でもバスタで散民防除を！

BASF

We create chemistry